国語　効果的に読む力を身に付け、読書コミュニティを担う児童の育成 -多様な読書活動を通して、本や学校図書館への愛着を育む-

船橋市立海神小学校教諭（同市立市場小学校教諭）　室（むろ）　恵美子（えみこ）

これまで、読書を児童の生活に根付かせたいと思い、実践を重ねてきたが、自ら学校図書館に通う児童はごく少数で学年が上がるほど能動的に読書をする児童が少なくなると感じていた。そこで本研究では、学校図書館の改造プロジェクトや本の紹介活動などの多様な読書活動を、６年生が継続的かつ能動的に行うことによって、校内の読書コミュニティの中核を児童が担う単元を行った。この活動を通して、６年生は本をめぐるコミュニケーションから生まれる読書の魅力に気付き、一人一人が読書生活へビジョンをもつことができた。今後も、読書を基盤として読む力を育む単元を開発し、実践を重ねるとともに、先生方に学校図書館を活用し、児童の読書生活を向上させる取り組みを広めていきたい。

社会　社会的事象から児童の歴史的思考力を育む社会科学習の在り方 -道標から町の変遷を捉える学習を通して-

富津市立大貫小学校教諭（同市立吉野小学校教諭）　中野（なかの）　浩太郎（こうたろう）

私は、これまで社会科の授業の中で過去から学んだことを実際の生活にどのように生かせばよいのか児童に考えさせることができなかった。そこで、過去から学んだことを現代や未来に生かす力である歴史的思考力について研究をした。検証授業では、小学校６年生の「江戸時代の生活と文化」の単元で石の道路標識である道標と房総の主要道路であった房総往還を題材にし、その価値を高めたり文化財を守る人達と関わらせたりする授業を行った。その結果、児童が住んでいる町の成り立ちを理解し地域の現在と未来のことを考え、地域の人と共に市の財産である文化財を守ろうとする姿が見られた。今後も児童の歴史的思考力を育み、より良い社会を考え主体的に問題解決ができる児童を増やしていきたい。

数学　見通しをもって証明問題に取り組む生徒の育成 -ふきだしと振り返りフローチャートの活用を通して-

香取市立佐原中学校教諭（同市立山田中学校教諭）　金澤（かなざわ）　知広（ともひろ）

全国学力・学習状況調査の報告書によると証明問題を苦手とする生徒は全国的に多く、千葉県では24％が無回答であることが分かった。このことから、見通しのもたせ方が課題であると考え、数学を苦手とする生徒に向けて、吹き出しを用いて思考を共有することや証明問題の解決で用いた方法や手順についてまとめる「振り返りフローチャート」を活用して検証を行った。その結果、吹き出しを活用することで思考の流れが明確になり、どのように考えていけばよいのかと解決の見通しをもつきっかけになった。また、振り返りフローチャートにまとめることで、思考が整理されて、次の学習への見通しにつながることが分かった。今後は、図形領域だけでなく他の領域にも利用ができると考え実践していく。

理科　生物どうしのつながりの学びを深める理科の授業づくり -学社連携とICTを活用して-

流山市立流山小学校教諭（前松戸市立新松戸南小学校教諭）　安達（あだち）　玲子（れいこ）

小学校第６学年「生物どうしの関わり」では食物連鎖の学習に水の中の小さな生き物を観察する活動が加わった。しかし、実際に水の中の生き物や「食う食われる」関係を確認することは難しく、タブレットを使った調べ学習になりがちである。本研究では目に見えない水の中の生き物やそれらが食べたり食べられたりする様子を実際に観察する授業を計画し、実践した。実際に観察させ、児童の知見を広げるために県立高等学校やふなばし三番瀬環境学習館と連携し、ICTを活用した。授業を行うことで、児童の生物に対する見方・考え方が変わり学びが深まったことが示された。今後は授業をさらに改善して研修会等でプランクトンの培養法を紹介し、どの教員も授業に活用できるようにしたい。

体育　運動の特性を生かしながら調整力と主体的に学習に取り組む態度を高める体育指導 -コーディネーショントレーニングの考え方を応用した体つくり運動を通して-

市原市立ちはら台桜小学校教諭　宮坂（みやさか）　琢弥（たくや）

運動好きな児童の育成を目指して実践を行ってきた中で、現代の児童たちの調整力（巧みに運動する身体能力）の低下が顕著であると感じるようになった。そこで、第５学年を対象として、コーディネーショントレーニングの考え方を応用し学習内容・学習過程を工夫したり、児童の課題を明確にする教師の見取りの判断基準を作成・活用したりする手立てを講じて実践を行った。その結果、体の動きの高まりや自己の学習を調整しようとする力の向上が認められた。児童の必要感をよそにトレーニング的な取組に偏るのではなく、運動の楽しさを実感し工夫しながら主体的に学習に取り組むことにより、体力向上を図ることができたことから、本研究の成果を体育授業の改善に活用していくことが期待できる。

家庭　持続可能な社会の構築に向けて思考・判断する力を育む消費の学習 -金銭や物の価値を実感させることを通して-

成田市立加良部小学校教諭（前印西市立内野小学校教諭）　柏木（かしわぎ）　麻理子（まりこ）

地球温暖化防止が叫ばれ、SDGsが広がりつつある今日、環境に配慮した生活をしていくことがより重要になってきている。そこで５年生家庭科の作品製作と消費生活の題材を通して金銭や物の価値を実感させるとともに、自分と物との関わり方を振り返らせ、環境に配慮した観点からの関わり方に気付かせる授業実践を行った。その結果、物を大切に使おうとする意識をもたせることができ、物の購入場面でも本当に必要な物だけ、長く使える物や丈夫な物、環境負荷の少ない物を選ぼうとするなど、関わる・手放す場面を考慮して思考し、判断することができるようになった。児童に環境の視点をどうもたせ、どう思考・判断させていくか、研究を通しての学びをこれから広めていきたいと思う。

道徳　振り返りの充実により道徳的価値を自己との関わりで考え深める道徳科学習 -総合単元的道徳学習におけるOPPシートの活用を通して-

香取市立佐原小学校教諭　吉田（よしだ）　真奈美（まなみ）

道徳科学習の振り返りが教師主導で自分事になりにくいことに課題を感じ、道徳的価値を自己との関わりで考え深めることを目指し、研究に取り組んだ。小学５年生に対し、学年目標を核とした総合単元的道徳学習において、自己評価と相互評価を取り入れたOPP（One Page Portfolio）シートを活用した授業を行った。その結果、児童は自分の経験や他者の意見を基にこれからの自分についての認識を広げたり明確にしたりでき、自身の変容や成長を実感し学習への不安感が減少した。また、教師による評価にOPPシートが役立つことも明らかになった。今後は地域の研究部と連携し、学校・学年の教育目標や別葉を生かした道徳科の単元化とそれに応じたOPPシートのさらなる活用に取り組んでいく。

学級経営　教員の認知次元に着目した児童理解と学級経営の在り方 -子供たちの自己肯定感の育みを目指して-

松戸市立中部小学校教諭　葭島（はいしま）（林田）　万輝子（まきこ）

教員の子供を見る視点（以下、認知次元）は一人一人違い、無意識に偏ることがある。この認知次元と自身のパーソナリティ（性格）とは関係があるのではないか。また、認知次元を捉え直すことで、子供たちの自己肯定感の育みに生かすことができないだろうか。この二点について、経験豊富な教員にBig Five理論を用いた調査を行い、子供の肯定的・否定的な見方の傾向について分析した。それらの情報を若手教員に向けて活用し、認知次元の捉え直しを図ることで、これまで見えていなかった子供たちの新たな一面に気付き、肯定的な声掛けや支援が増え、子供たちの自己肯定感を育むことができた。今後は学年会での活用等を通し、若手教員の育成やフォローの一助となることが期待できる。

現代的教育課題　情報活用能力を育成するための単元開発 -学校の壁を越えて、地域の課題解決に取り組む協働学習を通して-

大多喜町立大多喜小学校教諭　和山（わやま）　孝行（たかゆき）

文部科学省はSociety5.0時代の到来を見据え、情報活用能力を「学習の基盤となる資質・能力」として位置付けた。そこで、第５学年総合的な学習の時間において、ICTを活用して同地域の小学校２校をネットワークで繋ぎ、地域の課題解決に向けた協働学習、合同学習を行い、それらのプロセスが情報活用能力の育成に有効であるかを明らかにするために検証授業を行った。結果、効果的な情報の活用方法が身に付き、情報に対する見方・考え方を多角的に捉えられるようになるなど、本実践が情報活用能力の育成に有効であることが明らかとなった。今後は、地域の実態に合わせて各教科と関連付けたり、指導計画に位置付けたりするなど、情報活用能力の計画的な育成を目指して学校教育全体で取り組んでいきたい。

発達障害

自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍するADHD傾向のある児童の自己肯定感を高める支援の工夫
－応用行動分析シートを活用したケース会議と自立活動の指導を通して－

君津市立周西小学校教諭　加藤（かとう）　由佳里（ゆかり）

ADHD児の思春期の内在化問題や自己評価の低下が指摘されている。その為、低学年から自己肯定感を高める支援の必要性を感じている。

この研究では、ADHD傾向のある児童の自己肯定感を高めるため、応用行動分析の視点で作成したシートを活用し、環境調整を行った。また、自立活動の「時間における指導」で、児童の困難さに対する個別指導を行った。環境調整によって授業参加行動が増加し、自立活動の指導によって児童が安心できる人間関係に気付けたり、困難さやその対処方法を身に付けたりすることができ、児童の自己肯定感の高まりが示された。

今後は、具体的な例と共に自己肯定感を高める支援を広め、困難さを抱える児童や指導に悩む先生方の一助となりたいと願っている。

インクルーシブ教育

特別支援学校高等部専門学科における不登校・不登校傾向の生徒に対する個別最適な学びの検討

県立特別支援学校流山高等学園教諭　山﨑（やまざき）　慶太郎（けいたろう）

近年不登校の児童生徒数は増加傾向にあり、特別支援学校においても学校に馴染んでいない不登校や不登校傾向の生徒への対応が課題となっている。そこで本研究では、特別支援学校高等部専門学科に在籍する不登校・不登校傾向の生徒を対象に質問紙による調査を行い、学習適応の視点から個別最適な学びに向けた課題を洗い出した。また、そうした生徒を組織的に支援するための校内体制づくりを行い、オンラインを活用した実践をしたところ、不登校だった生徒が、オンラインから授業や学校行事に参加したり、現場実習に取り組んだりすることができた。本研究の成果から、不登校の生徒が学校と繋がりをもち続けられるように、多様な学びの選択肢を保障することが重要だと考える。

企業等派遣研修

チーム内の連携強化のため、企業の取組を学ぶ
－地域のニーズをもとに校内で情報共有するための有効な方法とは－

県立松戸特別支援学校教諭　吉田（よしだ）　鈴美（すずみ）

本校でコーディネーター業務に携わり６年目となった。校内での情報共有の方法や外部機関を活用した連携にどのような方法があるのか、企業ではどのように取り組んでいるのかを知りたいと思うようになった。株式会社高島屋柏店での情報共有は複数の共有方法があり、社内の連携を図るツールとして手引きとなる「販売員手帳」が作成されていた。教育現場でも手引きを作成し、コーディネーター業務について校内で周知することが大事だと感じた。更に、お客様目線を第一に接客する姿勢から多くのことを教わった。教育現場に繋げられる事柄が多く、相手の話をしっかり聞くことがニーズの把握や信頼関係に繋がることを再確認した。これからもニーズを捉え、チーム内の連携を高めたい。